The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

慈雲遵式の研究序説
——特に遵式の社会的な教化活動——

呂　淑　玲

はじめに　中国で仏教の教化活動が始まったのは、東晉以前であると思われる。その教化の方法を調べてみると多様な経典変相図があり、経典の詠経・誦経・転読などとともに梵唄・仏曲・吟唱・譚説・歌唱などがあり、また普通一般の講経・俗講もある。様々な角度から仏教思想は一般社会に浸透し、人々の生活の中に溶け込んでいった。

講経は寺院として仏教を弘宣する上でなすべきことである。事実、六朝・隋唐の時代には盛んに講経が行われ、有名な講師はその生涯で百遍・二百遍、さらに三百遍に及んで講座に臨んだという記録が高僧伝などで散見される。これらの講会で講ぜられた経典は四十種にも及んでいる。その中で数多く用いられたのは、涅槃・法華・華厳・般若・維摩・無量寿などの経や、摂論・三論・大智度論・成実論・倶舎論などの論のほか四分律などである。このような主に寺院で催される講会に出席する聴衆は出家が大部分を占めていた。もちろんこのような定期的に寺院が催す講会のほかに国家や貴族高官などの主催する大講会も臨時的に行われた。こちらの場合は在家信者も相当来聴したようである。そしてさらに寺院が一般に講会を開放し、公開講演的に行った講会は俗講と云われた。俗講は普通は寺院において催され、時には勅令によって寺院・講師・経典・期間などが指定されて開催された。遵式の教化活動は普通一般の講経・俗講に属するものである。彼が行った社会的な教化活動について『行業曲記』、『佛祖統紀』、『釋門正統』の中の遵式の伝記によって次に紹介する。

一、寶雲寺に入り四大経を講じたこと

遵式は淳化元年（九九〇）、人々の招きに応じて老師の寶雲寺に入り法華・維摩・涅槃・金光明等の四大経を講じた。その間のことが『行業曲記』に、「遵式が四大経を講じていると不思議なことに一匹の驢が毎日、お経を聞きにくる。」と書かれている。ここから、遵式が人々を教化するだけではなく、動物さえ感動させることがあったということがわかる。

印度學佛教學研究第五十二巻第一号　平成十五年十二月

NACSIS-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

二、僧俗を集めて浄土の業を専修したこと

遵式は至道二年（九九六）、浄土の業を始めて修めたと推定される。この以前に、浄土あるいは念仏三昧に関する言葉がない。彼が『天竺別集』巻中の「念仏三昧詩」の序に当時のことが書かれている。

遵式は至道二年（九九六）、寶雲寺の講堂において四明の道俗百余人を集めて、無量寿經の浄土願生をなした。この浄業会は至道二年から咸平五年までの六年間続けられたが、遵式が天台の東掖山に帰ったことで、中止せざるを得なかった。

三、請観音三昧を修して雨を祈ったこと

遵式は咸平三年（一〇〇〇）、四明の旱害のために知礼及び異聞等と共に請観音三昧を修して雨を祈った。三日間、請観音三昧を修しても雨が降らなかったら、遵式は捨身することを誓ったが、その結果、願いがかない、雨が降ったので、太守蘇がこの霊異を碑で記した。

この捨身という行動は宋代でよく行われた行であり、また高崖上で捨身台を造ることも盛んであった。遵式は大平興國八年（九八三）、國清寺の普賢菩薩像の前で、天台の教法を学ぶことを誓って燃指という捨身の行、また雍熙四年（九八七）、智顗の入滅の日（十一月二十四日）、智顗の四禅三昧を行うことを誓って一日中燃頂という捨身の行も行っている。

四、東掖山の西隅に精舎を建て、無量寿仏の像を造り念仏三昧を修したこと

遵式は咸平五年（一〇〇二）、寶雲寺から天台の東掖山に帰って精舎を建て、無量壽經によって無量寿仏の像を造り衆徒と共に念仏三昧を修することがあった。『行業曲記』に「西陽益宏精舎」とし、『佛祖統紀』に「西隅益建精舎」としている。これは恐らく「西陽益宏精舎」を「西隅益建精舎」としている筆誤ではないかと思われる。

五、白鶴廟の神に戒を授け、住民に供え物をする代わりに斎を勧めたこと

遵式は台州の住民が白鶴廟という淫祠（趙炳祠）を狂信し、競って神に供え物をするのを説諭して、かわりに斎を勧めた。ある日、遵式が住民と舟で白鶴廟に行く途中、大風がおこり、海が荒れた。住民はこれを神の仕業であると信じたが、遵式は白鶴廟に向かって仏の不殺戒の縁起を説いた。するとそのうちに風はなぎ、波も静かになり、何事もなく平穏になった。遵式は白鶴廟の神に仏の不殺戒を授け、住民に神に供え物をする代わりに斎を勧めた。遵式が亡くなった後も、嘉祐八年（一〇六三）まで天台県の人々が斎を行ったことが述べられている。これは遵式の地方の信仰に対する貢献である。

六、赤山寺に塔を建て、住民に漁をやめさせたこと

遵式が赤山寺で七重塔を建てる縁起がある。これは遵式が赤山寺の遺跡で掘った石函は梁王蕭詧（？～五六二年）が施

NACSIS-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

したものである。赤山の頂上には元来、塔が建てられていたが何らかの原因でなくなっていた。遵式が石函を掘ったその場所が光り輝くという現象、瑞兆があったので彼はそこに塔を再建させた。更にその辺りの漁民に漁業をやめさせた。

七、杭州昭慶寺で四部と戒律を宣揚したこと

遵式が大中祥符七年（一〇一四年）、昭慶寺の齊一法師に招かれ、ここで四部と戒律を講説した。また、杭州の人々の葬儀の慣習の酒肴も、遵式の説得によって蔬菜になった。

八、蘇州開元寺に法席を開いたこと

遵式は大中祥符八年（一〇一五年）、蘇州の刺史に招かれ開元寺で講経をしたことがある。しかし、蘇州の官僚たちは飲酒や肉食をせず、酒肉も買わないという、遵式の影響を受けた人々を恐れていた。そして、遵式は蘇州を離れ、再び杭州に戻った。

九、石梁壽昌寺で法華経を講じたこと

遵式は大中祥符九年（一〇一六年）三月、石梁壽昌寺で法華経を講じた。これが誰の招きによるものかということについて、『行業曲記』と『佛祖統紀』に二つの説がある。前者は天台僧正慧思であるとし、後者は当時の刺史王式だとしている。また、どの経典を講説したのか、前者ははっきり述べていないが、後者は法華経であるとしている。どちらの説が正しいか、年代からみると、『行業曲記』のほうが近く、信憑性も高い。遵式は天台僧正慧思に招かれ、壽昌寺で講経したと考えられる。

十、天竺寺で浄名経を講じたこと

遵式は天聖九年（一〇三一年）、天竺寺で浄名経を講じた。実際、これが彼の最後の布教となった。彼は自分自身の最後が近いことを悟り、後継者として祖韶を指名し、皆に別れを告げた。

おわりに　以上の教化活動以外に個人的な教化もある。例えば侍郎馬亮のために「浄土行願法門」と「浄土略伝」を撰述したこと。また王欽若が天禧三年（一〇一九）に、官僚たちを連れて遵式のいる杭州の山中を訪ねてきたとき、法華経と三法無差の講説をしたこと。また天聖四年（一〇二六）には杭州の刺史であった胡則に法の教えを説いたこと。また崔育才のために「施食観想」を撰述したこと。

一言にしていえば、遵式の教化活動は実践的であった。主に民衆を大切にその教化に力を注いでいた。それが宋代の、庶民中心の社会という趨勢と相俟って、遵式以降の仏教の教化活動は次第に庶民中心に、実践的な傾向を強めていく。

〈キーワード〉　慈雲、遵式、教化活動

（佛教大学大学院）

NACSIS-Electronic Library Service